

週刊

京都を歩く

2004
4/20
No. **40**
¥560

鴨川、白川の流りが育んだ
三味の音響く艶やかな町

先斗町・祇園新橋

先斗町 / 祇園新橋 / 鴨川

木屋町通・高瀬川 / 瑞泉寺 / 檀王法林寺

伝統美を訪ねて

和傘

京都には和傘がよく似合う。しかし、現在、紙と竹と漆で手間をかけて製作するのは京都でもただ一軒。茶道と深い関わりのある京の和傘作りを紹介しよう。

日本古来の形で作る 茶道家元指定の野点傘

「40年ほど前は、あちこちに和傘職人が居りました。お裏（裏千家）さんや表千家さん、西陣の織元さんにも、番傘に紋を入れた置き傘がありましたよ」

日吉屋先々代の奥さん、西堀ときわさんは言う。茶道との関わりは、今も深い。オリジナル商品「本式野点傘」は、茶道にふさわしくシンプルで品のよい傘をと、いう裏千家家元の依頼で、先々代が作り上げた。一般に、野点傘は広げた傘の先端が内側に折れ曲がった中国伝来の「妻折」形だが、この傘は番傘や蛇の目傘のように先端がまっすぐ伸びた日本古来の

「直の端（妻切）」。直の端の野点傘を作るのは、全国でも日吉屋だけという。

和傘は一本の竹を均等に40〜70に割って骨を作る。別の竹が混じったり、並べ順が違ったりすると段差ができるので、一本たりとも間違えられない。糊を炊くときは、気温や湿度に合わせてその日に使う糊の固さを調節する。もっとも大きな本式野点傘の場合、軒・中置きや胴張りといった工程では、大小80枚以上の和紙を張り合わせる。

「割にあわない仕事です（笑）。でも、竹と和紙の質感が渋いし、綺麗やし。廃れさせるわけにはいきません」
五代目当主になったばかり、29歳の西堀耕太郎さんはいった。

和傘の製作工程

下事

(糸で骨をつないで、傘の骨組みを仕上げる)

紙断ち

(和紙を型取りして裁断する)

糊炊き

(タピオカ糊を煮る)

軒・中置き

(傘の端と中ほどに部分的に和紙を張る)

胴張り

(傘全体に和紙を張る)

姿付け

(傘をたたんで固定し、傘紙に折り癖をつける)

色付け・漆掛け

(親骨の上だけに色や漆を塗る)

油引き

(亜麻仁油を傘紙に塗る)

天日干し

仕上げ

(付属品を取り付けて仕上げる)

◆日吉屋

京都市上京区堀川通寺之内東入ル
電話：075-441-6644
営業時間：10時～18時
定休日：不定、主に月曜
※来店の際は、電話で確認を。

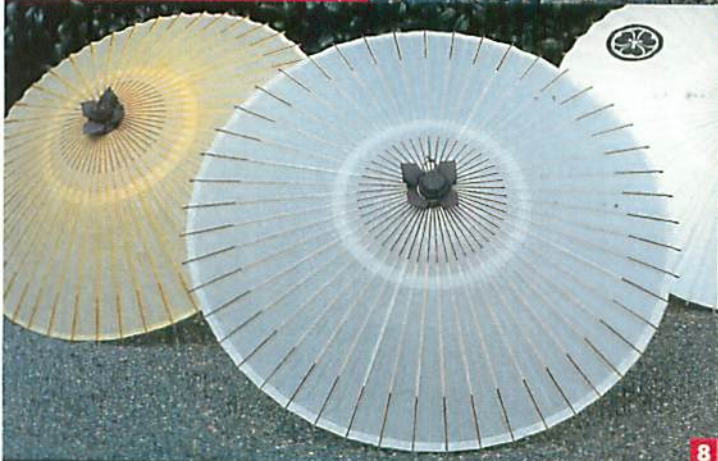


①店舗の向かいにある宝鏡寺の境内で、表裏両千家指定「本式野点傘」の「油引き」をする西堀耕太郎さん。写真は直径290cmのもっとも大きな野点傘。②番傘用の竹の部品とヘラ、タコ糸。下に敷いてあるのが手漉き美濃紙、右下の紙は型紙。番傘は親骨（和紙を張る骨）と小骨（開閉部分の内側の骨）各48本の骨で作る。③「下事」と呼ばれる工程の一部。タコ糸を4本どりにして糊を塗り、通す。④「胴張り」。親骨に糊を付け、傘紙全体の4分の1の大きさに切った和紙を張っていく。

⑤しっとり美しい蛇の目傘(紫1万5750円、赤1万3650円)。この名は同心円状の地色と白が蛇の眼に似ていることから名づけられたが、今では模様にかかわらず、番傘より柄が細く親骨数45本の雨用和傘の通称になっている。⑥油を引かず防水処理を施していない舞傘は、現在は日傘としてよく使われる。小骨に巻いた赤や黄色の飾り糸が美しく、柄が二つに分かれて携帯に便利。傘袋もついている。このピンクの日傘は日本でも販売されるが、カナダ輸出用の新色。⑦茶屋の店先の野点傘。本式野点傘の柄は野趣を重んじて孟宗竹を使用するが、ディスプレイ用の柄は漆仕上げにすることが多い。



5



8 7



9



⑥中央は完成したばかりの特撰番傘(1万8900円)。左は2年経過した番傘(1万3650円)で、次第に色が黄味がかってくる。右は製作途中の紋入り番傘(紋入れ代3150円〜)。⑨色とりどりの日傘(舞傘)。中央手前、蛇の目模様の日傘は絹製(1万3650円)、他は和紙製(6090円)。最後列左のピンク(6に同じ)と、その右のブルーは少し小ぶり(5040円)。

撮影協力/茶屋 竹林の里
撮影/高井聖雄

